

生きてさすらつてゐる

牧師 山本 護

もう半世紀も昔か。17～8歳の頃、長っ尻をする吉祥寺の喫茶店ボガでフォーク歌手の高田渡をよく見かけ、途中に寄っていく古本屋さかえ書房では晩年の金子光晴に遭遇していた、かもしれません。「かも」と言うのは、さかえ書房ではいろいろな偏屈爺さんが店主と茶を飲みながら駄弁っていたし、若造の私は金子の凄さを知らなかった。

詩人金子光晴、晩年の集大成とも言える三部作『IL、齒朶、蛇蝎の道』。なかでも“IL”は独特のキリスト像を描いた長編詩で、信仰者の範疇で考えても相当な発見がある気がします。

「一目みてすぐ、僕は、やつこさんだな、と見やぶつた。サンダルを突つかけた、なまつ白いその素足の甲に、釘で打ちぬいた、ふるきづのあとがあつたからだ」。それから金子は嬉しそうにキリストを山之口猷(詩人)と二重写しにしてみせますが、十字架の場面ではあの謎めいた叫びにぐっと耳を近づけます。「キリストのほんとうの悲しみは、彼につれなかつた人間たちよりも、父なる神の、ぞつとするようなつめたさによるものだった」。



「キリストは、弱さゆえにすこやかに、そのかなしみを抱いて、おそらく考えられないほどのながい歳月を、いまもなほ、生きてさすらつてゐる。人の世のつづくかぎりのみじめさとおろかさを見てすごさなければならぬ宿命は、神とおなじで、それこそ業罰と名づけることがふさはしいものだ」。

金子光晴の言葉はぶっきらぼうだが明確。どことなくトボケたような、痩せて脂分がないキリスト像になっていて、それが妙にリアルな地上のイエスとして描き出されます。

「キリストは、弱さのゆえに十字架につけられたが、神の力によって生きておられる。わたしたちもキリストに結ばれた者として弱い者だが、しかし、あなたがたに対しては、神の力によってキリストと共に生きている(Ⅱコリント 13:4)」。

聖句はくり返し読んで馴染んでいるせいか、どうも決まった納め所に誘導されて動揺が生じにくい。だが金子が描いてみせるキリストと重ね合わせると、聖書本文のキリストが危なっかしく、瑞々しく立ちあがって来ます。

「弱さゆえにすこやかに～いまもなほ、生きてさすらつてゐる」キリストは、神御自身が受けている宿命であり業罰。表現は物騒ですが、信仰的に外れているわけでもなく、いやむしろ、教会のスタンダードより真っ直ぐなくらいに感じます。

さかえ書房で駄弁っていたあの爺さんたち。それが金子光晴であろうと、表具屋の隠居であろうと、滲み出たその偏屈を今だったら「生きてさすらつてゐる」者への愛だなど分るので、お茶汲み係りでもしたのに、と青春の頑なさを後悔しています。Ω